



「日本主義」 反ダーウィニズム」で 世界の混乱に対峙する 今村洋史

前衆議院議員
医師

(いまむらひろぶみ)
昭和三十七年生まれ。旧福岡県土族。埼玉医科大学卒業。埼玉医大精神医学講座助教を経て、現在、いまむら病院理事長、愛知県精神科病院協会理事。第四十八回衆院選にて当選。一期を務める。愛知10区にて政治浪人中。著書『T P Pの罫』

はじめに

かつて宇宙物理学者のホーキング博士は、「何故、人類は他の知的文明と遭遇出来ないのか」と問われ、宇宙の時間単位では、文明の消長というものが瞬間的な時間のため、銀河系で数百万の知的文明が生まれても遭遇することがないのだ、と断じ

たという。

昨今の地球環境の荒廃を見れば、ホーキング博士ならずとも欲望の止めを知らぬ人類の行状が、地球という惑星の環境を破壊し尽くし、挙句自らを毀損し滅亡する可能性に容易に思い至る。

私は、人類、ホモ・サピエンスという人猿が自らの「種としての限界」を悟り、「自然的・文化的な共同体

である国柄」を理解することこそが、「文明の消滅」を回避し、人類を生きながらえさせる唯一の方法と信じる。

そのためには、突飛なようだが、十九世紀以来、生物進化論の定説となつている「ダーウィニズム」の進化に対する本質的な誤りを訂正する必要がある(「ダーウィニズム」及び、

それに「突然変異」という概念を付加した「ネオ・ダーウィニズム」が、生物学的に如何に誤謬ごびやうに満ちているかは後述する。

進化論は「我々は何者であり、何処へ行くのか」という人間の根源的な問いかけへの一つの答えである。故にそれに誤りがあれば、その影響は計り知れず、現代に通ずる思想・主義にも正しからぬ影響を与えている。

その最も直載な例が、進化論「ダーウィニズム」を社会的文化的進化に適応した「社会ダーウィニズム」である。その始祖であるスペンサーは、「自然淘汰」を「適者生存」と読み替え、自由な経済競争とその結果こそ社会進化をもたらすと唱えた。

その思想を基底とした「新保守主義」「新自由主義」という自由の名を借りた「自制的利かぬ強欲」と「共

存の否定」が世界を席卷し、今まさに人類は、ホーキング博士の言う「文明の消褪」に向かつて突き進んでいる。

世界的に経済的格差が広がり、富の偏在が指摘され、グローバリズムという「ワン・ワールド」化が押し進められる中で、その元凶とされる思想・主義への抑制と歯止めが一向に効かぬ背景に、「自然淘汰による適者生存」は「生物学的に正しい（バイオロジカル・コレクト）」というお墨付きがあり、当然、生物たる人類の社会でも正しいという認識があるからに違いない。その証左に「進化した〇〇」とか「淘汰された〇〇」等々、我々は無意識にだがダーウィニズムに基づいた言い回しを違和感なく受け入れてしまっている。

私は、「万物は流転する」という真理を生物において表したのが進化

論であると考え、生命創造主論やID論（インテリジェント・デザイン・超知性が生命を作ったという説）の信者ではない。また生物学的進化や社会的文化的進化を否定するものでもない。

しかし「ダーウィニズム」とそれから還元・派生した主義・思想が、人類の文明を毀損していることは揺るがせない事実であると考ええる。

そして、その解決には偏見のない生物進化への理解と、それを社会的文化的進化と同一視し混同しない認識が必要であるのではないか。

私は、図らずも本来日本人に生得の文化・伝統が、実は「種としての限界」をわきまえたものであり、生物共生の原理に沿うものであると考える。その文化・伝統、そして「武士道」という美学を取り戻すことが、

人類社会の、何より日本の存続に寄与することを「非ダーウィニズム」である今西錦司の進化論を引きながら証してみたいと思う。

そして日本の伝統・文化・美学を以て世界の混乱に対峙する日本思想を「日本主義」と名付け、以下にそれを考察する。

ダーウィニズムが生まれた背景

英国は一七六〇年代の産業革命により経済的発展を遂げ、一八二〇年代には資本主義と共に自由主義的傾向が強まっていた。当時、自由貿易により世界の最列強国となった英国の利益は比類なく、しかし結果として後進国の不利益をもたらしていた。

「比較優位」を唱えたりカードや『人口論』を著したマルサスも十九世紀

に入り各々の思想を確立しており、それらの著作に認められる「自由競争」「人口圧」という概念は、ビクトリア王朝の英国においては受け入れやすいものになっていた。

ダーウィンがその著書『種の起源』を発表したのは一八五九年である。

ダーウィンは「進化」の原理を「自然淘汰」に求め「競争」と「淘汰」が常態となった社会を「生物学的に正しい」とした。しかし、ダーウィ

ンが『種の起源』をマルサスの『人口論』にインスパイアされて書いたと言われるように、ダーウィンの進化の原理は、当時の英国の自由主義的な経済発展の原理を生物学に持ち込んだものであり、また人類社会の実際を生物社会に還元させたものであり、決して「生物学的に正しい」から書かれたものではないのだ。

ダーウィンの賞賛されるべき功績

は、「万物は流転する」という真理が生物においても同様であることを主唱したことに留められるべきであつたと思う。「ダーウィンの番犬」と呼ばれたハックスリーがダーウィン理論に少なからぬ異論を持ちながらダーウィニズムを支持したのは、聖書の万物創造主論に対し、自然科学的思考を持って生物進化を捉えたからである。ハックスリーはダーウィンを支持する反面、聖書の倫理的側面を重視し、学校における聖書教育も推進していた。

私は、ダーウィニズムを支持しないが、ハックスリーが「自然は道德とは無関係である」と述べたように、「自然科学的事実」と、「社会的道德」やその背景にある「伝統・文化」を混同もしくは前提としない思考が必要だと考える。

しかし、自然科学者としてダー

ウィニズムを支持したハックスリーの姿勢と異なり「適者生存」を唱えるスペンサー等の当時の社会学者により、ダーウィニズムの進化原理は社会進化学として応用されていく。爾来、社会を生物社会と同様に捉えた「社会の常態は競争・闘争にある」という前提で、十九世紀から二十世紀にかけて種々の主義・思想が展開されていった。

「社会ダーウィニズム」は「自由競争」を合言葉にして自由至上主義の「新自由主義、新保守主義」に繋がり、「共産主義」を唱えたマルクスは人類の歴史を「階級闘争」と規定し、ダーウィニズムの唯物論的な側面を讃えて自著『資本論』をダーウィンに献本した。

自由主義と共産主義、一見、両極にあるように思える主義・主張だが、実は「適者生存」を「市場原理的・

境に適應していることを還元論的に追認し、絶滅種を適應出来なかつた種と位置付けているに過ぎない。

また「ネオ・ダーウィニズム」では個体レベルの「突然変異」によって進化がもたらされるとする。それが事実なら、その進化は均一な速度で漸進的に起こることになる。(また付け加えるならば、ランダムに発生する生物の「突然変異」は、ほとんどの場合、不利な形質を伴う。「突然変異」は言わばDNAのコピーミスであるので、ある意味当然だと思われる)。

しかし、生物化石の年代決定を行ってみると生物の進化は漸進的ではなく、急激に変化する期間とほとんど変化しない期間があることが解ってきた。進化は均一な速度で進むのではなく、例えば比較的短期間

民主的」に行うか、「人工的・独裁的」に行うかの違いに過ぎない。

今、「自由至上主義」は自由競争の淘汰性、そしてその結果を至上の価値に掲げ、強欲の果てに自らの文明を破壊しつつある。また「共産主義」は粛清という独裁的な淘汰性で社会を運営しようとして失敗し、崩壊した。

ダーウィニズムの誤り

「ダーウィニズム」の現代版である「ネオ・ダーウィニズム」は、個体に有利な形質をもたらす原理として「突然変異」を想定し、集団遺伝学を取り込んだものとなっている。しかし、依然として「進化」の原点を個体に求めていることに変わりはない。

ダーウィニズムの言う進化とは同

に爆発的な種分化が起こった「カンブリア爆発」のように、ごく短期間に生物の多様化・進化を来すことが化石からは読み取れる。

このように、進化が漸進的ではなく断続的に起こると主張したのは、一九七二年に「断続平衡説」を唱えたグループであった。これに対しドーキンスなどのダーウィニストは、それを強く批判しているが、進化が漸進的でないことに対し明確な反論を示していない。それまでも断続平衡的な進化パターンはダーウィンと同時代の古生物学者によっても認識されていたが、その進化論的意義が深く追究されることはなかった。当時より「ダーウィニズム」への信奉は厚く、科学的事実を目の当たりにしても、依然として「非ダーウィニズム」は異端として批判され、

似非科学として喧伝されることが今

「種」の個体間で「生存競争」が行われ、生存に有利な形質を備えた個体が「自然淘汰」される。その結果、その個体の子孫が増え、その有利な形質を備えた個体で「種」が占められる。それが、種の進化だという。

ここでは「淘汰を経た個体…最適者」とは「生存したこと自体」によって定義される。これは「生存した個体」↓「最適者」であり、「最適者」↓「生存する個体」であるとなり、いわゆるトトロジージュと言わざるを得ない。つまり「自然淘汰」の意義は、「自然環境に適應している」という以上の意味を持たないのだ。

「個体」を「種」に置き換えても十分にダーウィニズムのいう「自然淘汰」という概念を満たすことから、それは解る。「生存した種」↓「最適種」、「最適種」↓「生存する種」となり、これも現存する種が自然環

も続いている。

現存する化石は、進化が「個体レベル」で起こるのではなく、「種」レベルで起きていることを明瞭に示している。進化が漸進的でないとするれば、同種個体間の生存競争により自然淘汰がなされるとした「ダーウィニズム」は根底から否定される。マルサスの『人口論』などから導かれた「生存競争」という個体間の競争」を前提としているが故に、ダーウィニズムは間違ってしまったのだ。

「種」と「個体」の解釈について今西錦司は自説をダーウィンの「競争原理」に対し「共存原理」とし、次のように述べる。

「同種の個体というものは、そのまとまりの中から任意の一個を取り出して、分類学者に見せれば直ちにそ

れが何という種に属する個体であるかが判明する程、どの個体も似ている。個体間の違いもない訳ではないが、種の存亡とか、あるいは進化という事とは、何ら関わりのない違いである。個体のあいだに甲乙がなければダーウィンが考えたような最適者というものも存在せず、いわんや突然変異が生じて個体間に甲乙が生じ、選択されることによって種社会の全部に広がり構成をすっかり変えてしまうなどということは、一種のフィクションとしては面白いけれども、生物社会も種社会もそのような革命を必要としない」とし、「種とそれを構成する個体との関係は、常に二にして一のものであり、変わるべき時が来たら、種社会も種の個体も皆、時を同じくして変わる」と結論付けている。

「競争原理」を理論の核にするダーツでも個か社会か、というようなことを問題にしている。それは片方に偏ったら個人主義になって、国家否定論になりますし、もう一方に転べば全体主義になって、ナチのドイツみたいなものになるでしょう。これは共に、種と個が二にして一であるというところを外れている。だから、種と個が二にして一であるという原則を守っている限りは、なにもそういう問題は起きないはずなんですけどね。

もう一つ大事なことは、ダーウィンは有利な条件を備えた個体が生存競争に勝ち残るといって、初めから生存競争ということを頭に置いているんです。個体からスタートして適者生存といいますが、生存競争で勝ち残ったものは勝てば官軍で後の子孫が保障されるとか、新しい種になるとかいうことを認めているわけで、

ウイニズムを否定する今西進化論は、例に洩れず、国内外から強い批判を受けた。特に「変わるべき時が来たら……変わる」という表現はトートロジーであると、格好な非難の対象となった。

しかし、昨今の今西進化論の再評価の気運は、遺伝情報DNA↓mRNA↓タンパク質という一方向にしか伝達されないという分子生物学のセントラルドグマが、RNA↓DNAという遺伝情報の流れが存在するという「エピジェネティクス理論」などで揺らぎ始めたことも無縁ではあるまい。

環境に応答するDNAが存在すれば、同じDNAを持つ「二」にして一である「種」と「個体」が一斉に変化することも説明が可能になるからだ。まさに進化は「種」レベルで起

こることになり、個体間の競争を進化の原動力に据えるダーウィニズムは根底から覆されつつある。

日本人の自然観

「ダーウィニズム」が誤っていることは明白であるにも拘らず、依然として定説としての地位は揺るがなない。それは「ダーウィニズム」の核を成す「競争原理」を否定することが、「個人の選択や活動の多様性と自由を実現する」という美名のもとに進められる「グローバリズム」「ワン・ワールド」思想の否定に繋がるからに違いない。

今西錦司は言う。

「ヨーロッパでは、種とか集団よりも個体を尊重する思想といえますか、そういう傾向が強いですね。い

これが今日まで続いている西欧社会

の一つの自然観であり、人生観になって個人主義と結びついているのです。個人主義で競争肯定ということですね。それが、残念なことに、二十世紀でちゃんと批判されずに二十一世紀まで持ち込まれようとしているんですね。まことに困ったことだと思っております」

引用した講演は一九七九年に行われた。氏が現代を生きていたら、この「社会ダーウィニズム」が世界を席卷し、文明を毀損する様を何と言うだろうか。

今西進化論の核に「棲み分け」という概念がある。

『種』と『種』は棲み分けることにより、それぞれの違った環境に適応し『新しい種』に変わる。棲み分けにより『種』間の争いは起こらず、進化した『多様な種』で生物社会全

体を構成してゆく」という。

また今西は生物社会について、「生物全体社会では『種』というのは部分社会であり、さらに『個体』は『種』を構成する一つ一つの要素に位置づけられ、『種』レベルから見ると『個体』に甲乙はない。それはどの『個体』が生き残って、どの『個体』が死んでも、『種』が存続してゆくために『個体』の甲乙は生じないように出来ているのだ。『種』は非常に保守的な存在なのだ」と述べる。

私は、今西進化論を「生物学的に正しい」と信ずるひとりだが、この進化論は日本以外からは決して生まれなかったものだと思う。氏はダーウィニズムの「競争原理」に対して自身の進化論を「共存原理」と述べているが、この「共存原理」は「共

生」と言い換えても良いものだと思う。それこそが日本人に生得の自然観・人生観そのものなのだ。

キリスト教を始めとする唯神教圏では「神」「人」「自然」はそれぞれはつきりと区別され、別個のものとして存在する。全知全能の唯神の下に、人は自然を征服するべきものなのだという。一方、日本人本来の自然観・人生観の底流には「万物に神霊が宿り、人はその中で神々と共生する」とする古神道的世界観がある。古神道的自然観においては三者の関係は渾然としている。日本人は森羅万象に大きな力を感じ、自然そのものを「神」として崇拜した。

日本の伝統思想では人という「種」も生物社会を構成する一部であり、多様な「種」と「棲み分け」共生する存在なのだ。

ということは、いつの時代のどの社会も変わらない」

「戦国から幕末に至るまでの日本人は、人間というものは、どう行動すれば美しいのかということばかりを考えてきたような感じがあります。人間はどう行動すれば美しいか、であって、どう成功するかではない。幕末になると『聖人は成敗利潤を問わず』という行動主義者が現れて、ただ自分の行動を美しくするということだけで出て来る。それは日本人の特殊性というよりも、むしろ、いわゆる江戸教養時代が、三百年続いたら、その三百年の縮図みたいなものが幕末に出て来ているのではないか」

明治期の日本は「坂の上の雲」を目指して駆け上がるために、国民の「血と汗と死」を以て贖い、日露戦

武士道という国民精神

私は今西の「棲み分け」と同じ論理で、自然発生的な国家・民族も互いに「棲み分け」し、共存することが生物たる人類の本来の姿なのではないかと考える。かつて日本は大東亜会議を開き、諸民族・国家の独立と民族自決を唱え、欧米列強の「社会ダーウィニズム」に則った帝国主義的植民地支配を排する思想を掲げた。

当時の日本の主張について、自らの大義を正当化する為だという批判があることは承知しているが、何よりもその大義が我々の伝統・文化から導き出されたものであり、「生物学的に正しい」ことだと我々自身が必要があるのではないかと。

明治以来、数々の困難と屈辱を退

争に辛うじて勝利し、ようやく列強に伍することが出来たのだ。有色人種で日本だけが近代国家に成りおこせたのは、江戸期を通じて醸成された武士道という蒸留酒が武士のみならず、庄屋階級などの知識階級に行き渡っていたからに違いない。武士道は当初、武士階級のものだったが、やがて国民全体の憧れとなり、その精神となった。「大和魂」すなわち日本人の魂はこの国の「民族精神・フォルクスガイスト」を表すに至った。

幕末の文久三年に脱藩し、米国に密出国した新島襄は、後にこう述べている。

「この拳は藩主や親を捨てるといふことではない。自分一個の飲食栄華のためでもない。全く国家のためである。自分の小さな力を少しでもこ

け、日本が欧米列強の植民地に墮すことを免れたのは、自身と国家の命運が一に重なることを、国民が心底から認識していたからである。

しかし、その末裔たる我々が祖先の成し得たことも忘れ、自らの歴史・伝統・文化を学ばなくなってしまうた責を戦後七十年経た今、単に日本解体の占領政策ばかりに負わせることで良いのだろうか。

先に日本の伝統・文化の根底に古神道的自然観があることを述べたが、その伝統・文化を美学として表すものが武士道である。

司馬遼太郎は言う。

「我々が、これは日本人である、と行って誇りうる美的精神像は今なお、侍というものでしかない。人間、どう振る舞い、どう行動することが最も美しいか、という精神の美意識のありかが、人の最も肝要なものだ

の振るわざる国家と万民のために尽くそうと覚悟したのである」

新島だけでない、武士道の美学を任じた自身と国家の命運が一であるという覚悟の青年たち、国民が明治期の日本を支え切ったのだと思う。

新渡戸稲造も著書『武士道』で言う。

「西洋の政治と学問を学び始めた時、日本人を動かした推進力は決して富の増加ではなかった。ましてや西洋の習慣の模倣などではなかったのである」

続けてこうも言う。

「武士道の余命は後幾ばくもないかのようである。悔りがたい諸勢力が武士道をおびやかすべく動き始めている」と。

この『武士道』が書かれたのは明治三十二年（一八九九）である。殖産興業し近代国家に至りつつある日

本にも「社会ダーウィニズム」流の資本主義の波が打ち寄せ、また「国民国家」という蒸留酒の酩酊も三数十年で醒めつつあった。

江戸期に醸成された「武士道」という国民精神は明治三十八年の日露戦争の勝利で遣い果たされてしまったのか。中村草田男が「降る雪や明治は遠くなりけり」と歌ったのは、昭和六（一九三一）年のことであった。

日本主義

これまで縷々日本の伝統・文化である「古神道の自然観」「武士道」という国民精神」について述べ、現在、世界を席卷している「新保守主義」や「新自由主義」の、その根本思想である還元主義により恣意的に歪められた「社会ダーウィニズム」が、

日本の伝統・文化と真つ向から対立するものであることを私なりに証したつもりである。

私は、反ダーウィニズムであるが、ダーウィンをして『種の起源』を執筆させたマルサスの『人口論』の人口原理が現実化するのではないか、という怖れを強く抱く。

実はマルサスは自律的な人口調節論者であり、ある意味、「種の限界」を意識していた面もあるが、二十一世紀の今日、「自由」の名を借りたマルサスの後継者であるダーウィニスト達の止まるところを知らぬ強欲のために人類の文明は毀損され、『ダーウィニズム』の選民的な優生思想で滅亡の危機を回避する動きがある。

司馬遼太郎は明治国家について、歴史のなかで独立し、連鎖せずに孤立して、世界史にそういう国が

あった、今の日本人の私物ではない、と考える方が良いという意味のことを述べているが、私はそうは思わない。

世界の中で諸民族、諸宗教の共存・共栄を為しうる伝統・文化を持った「反ダーウィニズム」の国家・民族は、「棲み分け」の思想がある日本しかない。我々の先人が帝国主義を振りかざす欧米列強と戦い、敗れはしたが、多くの有色人種民族の独立を促すことが出来たこと、また我々が幾多の英霊の犠牲によつて生かされていることを決して忘れてはならない。

「ダーウィニズム」「社会ダーウィニズム」や、それに続く「新保守主義」「新自由主義」が如何に生物の理に反するかは既に述べた。私は、その「ダーウィニズム」等と対峙する日本の伝統・文化を「日本主義」と名

付け、以下にその概要を述べる。

〈日本主義〉

1. 一君万民
2. 君民一体
3. 独立割拠

1. 一君万民
日本は「国家」と「国民」だけで成り立つものではない。「天皇」が神道を司る唯一の権威であり、民族全体の源としてそこにある。その下では、赤子として万民が平等である。

我が国の「天皇」は他国の王と異なり、神々や民のために祈りを捧げる無私な存在であり、無私なるが故にその権威は決して侵されることはない。

無私なる「天皇」の下で互いに平等な「国民」であることにより、

日本は国民国家として成立する。

2. 君民一体

諸民族が棲み分けることで人類社会を構成すると想定すると、日本民族も「種」単位として捉えられる。

我々日本人は先の大戦で武士道の最も劇的な発露である「特別攻撃隊」を経験している。昨今のイスラムにおけるジハードと違い、非戦闘員に対する攻撃ではない。「特別攻撃隊」のパイロットたちは、決して狂信者ではなく、あの時代において高等教育を受けた若者達だった。彼らは自らの命を捨てて行う作戦が日本の勝利を導くとは思っていなかった。それでも死地に赴いたのは「種」たる民族

と「個体」たる自分は二にして一であるとして祖国の運命と自らの

運命が重なったからこそ、あの戦いが出来たのだと思う。

同様な思いで昭和天皇も御前会議で「私自身はいかなる処罰を受けても構わない。国民の生命を救いたい」と聖断をくだされた。

日本は我欲を捨てた人々に支えられた君民一体の国家なのである。

3. 独立割拠

国家が存立するために「エネルギー」「食糧」「防衛」の安全保障が必要になる。大東亜戦争を評して、昭和天皇は「石油に始まり、石油に終わったな」と述べられている。

人類社会のなかで日本が棲み分けを行い、独立割拠をするためには第一に「エネルギー」の安全保障は必須である。端的に言えば「エネルギー」さえ確保できれば他の「食糧」「防衛」の安全保障も可能

になるのである。

しかし、日本が「エネルギー」を持たざる国であることは地勢的に運命づけられている。このため「エネルギー」、特に化石燃料については他国に恃まざるを得ず、やはり東南アジアに眼を向けた大東亜共栄圏構想が必要になるだろう。外交・防衛においては「社会ダーウィニズム」に染まった米国、中国の二大人工国家とは一線を画す必要がある。自国民をも淘汰し、他国を蹂躪する国家（プレデターネーション）に対し、日本は武士道に任ずる道義国家として「防衛力」を保持し対峙、独立割拠していなければならない。

おわりに

十九世紀以来、「ダーウィニズム」

の誤謬を恣意的に用いた「社会ダーウィニズム」の弊害は枚挙にいとまがない。「新保守主義」「新自由主義」により、ついには人類文明をも毀損され亡ぼされつつある。幕末以来の日本の近代国家としての歩みは、この「社会ダーウィニズム」ひいては故国喪失者たちが夢想するグローバリズムという「ワン・ワールド」帝國主義への抵抗であった。

しかし、その歩みの中でいつしか日本独自の文化・伝統を見失い、武士道という「国民精神」をすり減らし、「社会ダーウィニズム」に浸食され、遂には大東亜戦争で共産主義を含む「ワン・ワールド」勢力に敗れたのだ。

我々の気高き日本は、決して戦後七十年の中だけで失われたのではない。我々は悟らなければならない。「棲み分け」の思想により、あらゆる自然、あらゆる民族と共生する「人類の限界」を知ることこそが、世界の安寧をもたらすということ。

我々は、再びこの「日本主義」を以て、世界に対峙しなければならぬ。

当代きつてのダーウィニストであるドーキンスは積極的な無神論者である。他の者もドーキンスのように自ら表明しなくとも消極的無神論者が殆どであろう。

しかし、私は、私たちを生かすために黙々と戦地に赴き、非命に斃れて行った多くの将兵が神となつて私たちを、日本を見守ってくれていると信じている。

日本には「神道」という自然観があり、「武士道」という倫理観があるのだ。かつて同胞が、民族の誇りをかけて戦ったことを、私は決して忘れはしない。